

# 中国語における日源新詞の受容 — 一定着度調査を中心として —

張 曉娜

## The acceptance of *Riyuanxinci*, in Chinese: Based on the survey of the degree of acceptance of new loanwords from Japanese to Chinese

ZHANG, Xiaona

### Abstract

The new loanwords from Japanese to Chinese such as “御宅族” (オタク), “萌” (萌え), etc., introduced after the implementation of the “reform and opening up” policy of China in 1978, are called “日源新詞 *Riyuanxinci*”.

This article tries to show the correlation between the degree of acceptance of *Riyuanxinci* and the social categories of Chinese native speakers such as gender, age, region, etc. The article also tries to figure out the characteristics of words that are easy to be accepted, and the characteristics of users who are easy/difficult to accept new words. Based on the results, the paper will clarify the actual situation of acceptance of *Riyuanxinci* in Chinese society.

The questionnaire survey was conducted from August to September 2015 in three cities (Shanghai, Jinan, and Tancheng) on Chinese native speakers over the age of 14. The respondents were asked to make a judgment on the cognitive level of each word from “use (4 points)”, “understand (3 points)”, “know (2 points)”, and “don’t know (1 point)”. At last, the survey got responses from 405 people. Based on the responses, I calculated the acceptance points of each word and each respondent. Using these points, the degree of acceptance of 35 words was confirmed and the relationship to respondents’ social attributes were analyzed.

As results of some statistical analyses, I found that the 35 *Riyuanxinci* were generally established at the level of “know” to “understand”, and the degree of acceptance of the *Riyuanxinci* was influenced by region, age, academic background and occupation. The strongest factor was region. I argued that region could be influential because of the information gap between the regions, the differences in density of social networks, and the interregional disparity of educational background.

It is presumed that the acceptance process of the *Riyuanxinci* is accepted by young people with a high education level in large cities first and then spreads to other generations and regions. In addition, the acceptance process of some *Riyuanxinci* is different from others, it is thought that these words are intensively accepted in a particular group first and then become established in society. For example, those words which related to Japanese subculture are firstly accepted by teenagers and tend to spread to other generations.

**Keywords** : *Riyuanxinci*, loanwords from Japanese to Chinese, degree of acceptance

### 要旨

“御宅族” (オタク) “萌” (萌え) 等のように、1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。

本研究は、日源新詞の定着度を、性差、年齢差などの言語使用者の属性との関わりから確認し、受容されやすい語の性質、また新語を受け入れやすい/受け入れにくい使用者の特徴などを把握する。その結果から、日源新詞の社会内での受容の実態をあきらかにする。

本研究の日源新詞定着度調査は、2015年8月から9月にかけて、中国の3つの都市で14才以上の中国語母語話者計405人を対象に質問紙により実施した。回答者には、各調査語について、「使用（4点）」「理解（3点）」「認知（2点）」「未知（1点）」の4段階で判定することを求めた。その結果をもとに、調査語ごと及び調査回答者ごとに定着の度合いを数値化した。その数値をもとに、35の調査語の定着の様相を確認し、回答者の属性との関連を分析した。

その結果、35語の日源新詞は全体的には「認知」から「理解」という段階に定着していることがわかった。回答者の属性との関係を見ると、新詞の定着度には、地域、年齢、学歴、職業が影響すること、また、5つの属性のうち、地域の影響が一番強いことなどの結果が得られた。地域が一番影響するのは、地域間の情報格差、社会網の密度の差、そして学歴の地域間格差などの原因が考えられる。

現在の日源新詞の受容プロセスは、まず大都市の高学歴の若年層によって受容され、他の世代や地域に広まっていくものと推測される。また、特定の集団において集中的に受容されるものは、他の日源新詞と異なる受容のプロセスを経て社会の中に定着していくと考えられる。例えば、サブカルチャー関係のものは、まず10代の若年層によって受容され、他の世代に広がっていく傾向にある。

キーワード：日源新詞 日本語由来の外来語 定着度

## 1. はじめに

“御宅族”（オタク<sup>1</sup>）“达人”（達人）“萌”（萌え）等のように、1978年の中国の「改革開放」政策<sup>2</sup>が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。

これまでの日源新詞に関する研究は、意味論や語用論などの研究（洪洁2011、芦茜2011など）や、文化、歴史的研究（顾江萍2007）、語源学から行った研究（彭广陆2000、2002、2003など）が多かったが、日源新詞の実態を言語使用者との関係でとらえた研究は非常に少ない。そこで本研究は、譙燕等（2011）『日源新詞研究』資料編に収録された日源新詞を調査対象とし、質問紙調査で日源新詞の定着度を調べ、調査した日源新詞がどの程度社会的に普及しているのかを確認する。そして、調査語の定着度と地域、性別、年齢、学歴、職業など、回答者の社会的属性との関連を分析し、受容されやすい語の性質、また新語を受け入れやすい/受け入れにくい使用者の特徴などを把握する。その結果から、日源新詞の社会内での受容の実態をあきらかにする。

## 2. 先行研究の問題点

日本語由来の外来語を研究する代表的な学者には、高名凱、刘正琰、史有为、沈国威、朱京伟、彭广陆などが挙げられる。彼らは日本語由来の外来語を語用論や語源学などから分析し、

1 括弧内は日本語原語である。

2 1978年の「改革開放」の政策をきっかけに、中国は日本語由来の外来語の輸入ブームを迎えた。特に21世紀に入ってから、科学技術の発展やグローバル化の進行と共に、大量の語彙を借用するようになった。

外来語研究の基礎を構築してきた。

その中でも譙燕等（2011）の『日源新詞研究』は、特に日源新詞を対象とした初めての専門書である。これは「研究編」と「資料編」の2部からなる。研究編では、“人脉”（人脈）“料理”（料理）“媒体”（媒体）“完胜”（完勝）“封杀”（封殺）“王道”（王道）“职场”（職場）“人气”（人気）“语感”（語感）“御宅族”（オタク）計10語の「日源新詞」が、その出現時期、中国語への受け入れと使用状況、また日本語との対照などの面から分析されている。また資料編では、75の「日源新詞」に関して、中日の意味の対照、慣用表現などが収録されている。

本稿は、この譙燕等（2011）の資料編の語彙を研究対象にする。その理由はふたつある。まず、この『日源新詞研究』に収録された語彙は、すでに譙燕、徐一平、施建军らが「日源」（日本語由来）と「新詞」（1978年改革開放政策以降に現れた語彙）という2つの基準を満たすものと認めている語である。もうひとつは、「資料編」に収録された75語のほとんどは「借形語」<sup>3</sup>であるためである。「借形」は「日本語由来の外来語」が中国語の中の一般の外来語と区別される最も重要な特徴であり、それを見ることによって初めて日源新詞の受容の特徴を把握できるからである。

彭广陆（2013:17）は中国語における外来語の定着の度合いを判定する時に、概ね2通りの方法がある指摘した。1つは辞書への収録状況を見ることであり、もう1つは新聞への使用状況、特に中国共産党機関紙である『人民日报』あるいはそれに準ずる新聞に一般に使用されているかどうかを見ることである。譙燕等（2011）「研究編」に収録された10篇の論文も、中国語の辞書への収録状況と『人民日报』等の新聞での使用状況を通して、中国語への受け入れ現状を分析している。

しかしながら、これらの方法では、中国語話者たちの間で外来語がどのように定着しているかをとらえることはむずかしい。そのため本稿では、この2通りの方法のほかに、日源新詞の使用に関する実態調査により、その定着度を把握するという方法を取る。日源新詞の定着度は、言語使用者としての中国語母語話者たちが個々の日源新詞をどのように認知・理解しているかをとらえることによってさらに正確にとらえることができるようになると考えられる。しかしながら、筆者が調べたところ、中国語に関しては、外来語に関する実態を言語使用者との関係でとらえた研究は、アルファベットを使用する西洋語が中心であり、日源新詞に関するものは非常に少ない（秦晓晖，2015）。そこで本研究は、3.1で述べる過去の外来語に関する実態調査の調査方法を取り入れながら、日源新詞の定着度についての調査を計画した。

### 3. 日源新詞の定着度に関する調査

#### 3.1 定着度をとらえる方法

本稿で参照した実態調査は次の3つである。

##### ①文化庁（2003）の「平成14年度 国語に関する世論調査」の「カタカナ語」についての定着度調査

3 借形語は、k è l è 可乐 (cola) shā f ā 沙发 (sofa) のように音声ではなく、文字表記を元に取り入れられた外来語である。日本語由来の外来語の場合は、音声は中国語音になるが同じ漢字が使用される。例：催眠 (cuī miǎn 催眠), 手续 (shǒu xù 手続き)

- ②国立国語研究所（2006）の平成15年～18年「外来語」言い換え提案  
 ③梁敏鎬（2007）の日本と韓国の外来語に関する受容度調査

①と②からは外来語の定着の程度を「未知」「認知」「理解」「使用」の4段階で表す分類法を、③からはその4段階に分ける点数化の方法を取り入れた。

①と②は共に日本語における外来語の定着度を探るものであり、その質問では個々の外来語に対して、「未知」（その語を見たり聞いたりしたことがない）「認知」（その語を見たり聞いたりしたことがある）、「理解」（その語の意味が分かる）、「使用」（その語を使用する）がたずねられている。本研究では、この手法を参考にして、中国語における「日源新詞」の定着度を求めた。さらに③を参考に、「未知」「認知」「理解」「使用」の4段階それぞれに1点、2点、3点、4点の得点を与え、定着の度合いを数値化した。その結果が、都市、性別、年齢、学歴、職業の回答者の5つの属性とどのように関連しているかを考察した。調査は質問紙を用いておこなった。

### 3.2 調査語

調査語は、譙燕等（2011）「資料編」に収録された75語<sup>4</sup>から次の手順で選んだ。まず、予備調査でこの75語の認知率（調査語を「聞いたことがある」と回答した者の割合）を調べ、その結果を元に、高い認知率の語（76%～100%）、中の語（40%～75%）、低の語（0%～39%）の3つに分けた。その上で、高認知率グループからは15語、中は10語、低は10語<sup>5</sup>を選び出した。

表1 調査語一覧

高グループ	中グループ	低グループ
达人（達人）	居酒屋（居酒屋）	中古车（中古車）
低迷（低迷）	买春（買春）	舌祸（舌禍）
封杀（封殺）	民宿（民宿）	苦手（苦手）
料理（料理）	年中无休（年中無休）	定番（定番）
媒体（媒体）	御宅族（オタク）	中水（中水）
萌（萌え）	耽美（耽美）	乐胜（樂勝）
人脉（人脈）	声优（声優）	年功序列（年功序列）
人气（人気）	败因（敗因）	少子化（少子化）
完败（完敗）	连霸（連覇）	風呂（風呂）
王道（王道）	绝赞（絶賛）	熟年（熟年）
职场（職場）		
单品（单品）		
量贩店（量販店）		
写真（写真）		
运营（運営）		

4 譙燕等（2011）の『日源新詞研究』は北京日本学研究中心日本語研究室が行った「日源新詞研究」の成果の一部であり、「資料編」にはここで取り上げた75語が収録されている。しかし、どのような選定基準に基づいて75語が抽出されたかについては述べられていない。

5 予備調査の結果では、高、中、低グループにはそれぞれ42語、19語、14語あった。当初は各グループから均等に選び出す予定だったが、高グループの数が他の2グループの2倍以上であるため、バランスを考える上で高グループを5語多く選んだ。その方法は、各グループの語彙を認知率の高い順に並べて、高グループでは2語おきに、中、低グループは1語おきに選び出すというやり方で行った。

### 3.3 分析の手順

調査は質問紙により回答を求めた。質問では、35の日源新詞を回答者たちがどのように受容しているかをたずねた。それぞれの語に対する回答は、以下の4つから選ぶよう求めた。

- ・ 質問にあげた日源新詞を聞いたことがない（以下「未知」）
- ・ 質問にあげた日源新詞を聞いたことがあるが、意味は分からない（以下「認知」）
- ・ 質問にあげた日源新詞の意味は分かるが、使わない（以下「理解」）
- ・ 質問にあげた日源新詞を使う（以下「使用」）

この4段階の定着度（未知、認知、理解、使用）にそれぞれ1点、2点、3点、4点の点数を与えた。この未知、認知、理解、使用は実際にはそれぞれ異なる現象であるが、ここでは語の定着度を示すものと見なした。そうすることで、調査語ごとおよび調査回答者ごとの傾向を数値で示すことができるようになる。

分析手順は次のとおりである。まず調査回答者全体と個人それぞれの平均得点を算出し、調査回答者の受容状況を属性別に見る。つぎに調査語ごとに各語の認知率<sup>6</sup>（聞いたことがある割合）、理解率（意味が分かる割合）、使用率（使う割合）そして平均定着度を算出して各語の定着の具合を確認し、回答者の社会的属性との関連を考察した。

### 3.4 調査対象者

回答者は、以下の3つの都市の14才以上の男女405人である。当初は層別抽出で各都市において100名程度（10代、20代、30代、40代、50代以上の5つの世代、男女はほぼ同数）を対象とする予定だったが、最終的には雪だるま式抽出<sup>7</sup>も含めて405人の回答を得た。

3つの都市を選んだ理由は、都市の規模により外来語の受容に差があるかどうかを確認するためである。都市の選定は2014年に中国の国家国務院が発表した都市規模の分類基準<sup>8</sup>をもとに行い、「超大都市」であるシャンハイ、「大都市」であるサイナンと「小都市」であるタンジョウを選んだ。

- ・ 母集団：上海市（シャンハイ）これらの3つの地域の満14才以上の男女  
           山東省・済南市（サイナン）  
           山東省・臨沂市（リングイ）・郟城県（タンジョウ）
- ・ 標本数：450人（うち405人分回収 回収率90%）
- ・ 抽出方法：性別、年齢層別で層別抽出と雪だるま式抽出

6 「認知率」「理解率」「使用率」は以下のように求めた。「認知率」は「認知」＋「理解」＋「使用」、 「理解率」は「理解」＋「使用」、 「使用率」は「使用」を選んだ割合の合計である。

7 調査対象者の抽出は、都市、年齢、性別による層別抽出を原則としたが、都市ごとに各層のデータが不足した場合にのみ雪だるま式抽出でデータを補充した。雪だるま式抽出はあくまでも補助的な手段として利用したので、調査結果に大きな影響はない。

8 中国国務院が発表した『国务院关于调整城市规模划分标准的通知』（国发〔2014〕51号）の都市規模の分類基準によると、シャンハイは人口が2415万人（2015）で「超大都市」、サイナンは人口が625.73万人（2015）で「大都市」、タンジョウは人口が97万人で「小都市」として扱われる。

### 3.5 調査期間・場所および調査法

調査は2015年8月から9月に、筆者自身および知人を通して行った。質問紙への回答は、下記のような地元の人々が集まる場所で質問紙を渡し、配布時にその場で回答を求めるかたちで得た。

- ・期間：2015年8月～9月
- ・場所：デパート，市立図書館，学校，病院，役所など

### 3.6 回答者の属性

地域，性別，年齢，学歴，職業による回答者の分類は以下の通りである。

#### 〔地域〕

シャンハイ，サイナン，タンジョウ3地域の人数はそれぞれ151人，91人，163人である。サイナンの人数はほかの2都市より少ない。その理由は，当初の計画では各都市で100名程度の調査を行う予定だったが，シャンハイとタンジョウではそれを上回る回答数が得られたことによる。

表2 地域による回答者の分類

都市	シャンハイ	サイナン	タンジョウ	合計
人数	151	91	163	405
%	37.3%	22.5%	40.2%	100%

#### 〔性別〕

男性は194人に対し，女性は211人である。男性の人数がやや少ないが，男女の比率に大きな差はない。

表3 性別による回答者の分類

性別	男	女	合計
人数	194	211	405
%	47.9%	52.1%	100%

#### 〔年齢〕

「10代」から「50代及びそれ以上」の5つの段階の人数はそれぞれ85人，86人，99人，81人，53人である。各地域それぞれの年齢と性別による内訳は，表5，表6，表7の通りである。

表4 年齢による回答者の分類

年齢層	10-19	20-29	30-39	40-49	50以上	合計
人数	85	86	99	81	53	405
%	21.0%	21.2%	24.4%	20.0%	13.1%	100%

(注：年齢に関しては欠損値が1つあった)

〔地域・年齢・性別〕

表5 シャンハイ（地域・年齢・性別）

年齢層		10-19		20-29		30-39		40-49		50以上		合計	
男	女	14	25	13	9	23	13	15	10	13	15	65	85
合計		39		22		36		25		28		150	

表6 サイナン（地域・年齢・性別）

年齢層		10-19		20-29		30-39		40-49		50以上		合計	
男	女	9	8	12	9	10	11	9	10	5	8	45	46
合計		17		21		21		19		13		91	

表7 タンジョウ（地域・年齢・性別）

年齢層		10-19		20-29		30-39		40-49		50以上		合計	
男	女	18	11	17	26	20	22	20	17	8	4	83	80
合計		29		43		42		37		12		163	

〔学歴〕

「中学校及びそれ以下」が51人、「高校及び高専」が82人、「大学及び短大」が249人、「大学院」が23人である。回答者には「大学及び短大」が一番多いが、現在の中国では20代以上の人々は大学や短大などの高等教育を受けている人の割合が多いためと考えられる。

表8 学歴による回答者の分類

学歴	中学校 / 以下	高校 / 高専	大学 / 短大	院生	合計
人数	51	82	249	23	405
%	12.6%	20.2%	61.5%	5.7%	100.0%

〔職業〕

職業については項目を列挙せずに回答者に自由記述で答えさせ、その結果を、学生、公務員、会社員、教師、医療関係者、メディア関係者、その他の計7つのカテゴリーに分類した。日源新詞は主に各種のメディアを経由して輸入されるので、メディア関係者が一般の人より先に触れることができると予想される。そのため、その人々が一般人より受容していると推測し、メディア関係者を1つのカテゴリーとして立てた。

7つの職業の人数はそれぞれ学生（97）、公務員（79）、会社員（58）、教師（43）、医療関係者（58）、メディア関係者（22）、その他（43）である。全体では学生の人数が一番多く、メディア関係者が一番少ない。

表9 職業による回答者の分類

職業	学生	公務員	会社員	教師	医療関係者	メディア関係者	その他	欠損値	合計
人数	97	79	58	43	58	22	43	5	405
%	24.3%	19.5%	14.3%	10.6%	14.3%	5.4%	10.6%	1.2%	100.0%

## 4. 定着度調査の結果

### 4.1 調査回答者属性による分析

405人の調査回答者全体の平均得点は2.40点である。405人の標本数から標本誤差を算出すると、その95%信頼区間は2.36~2.46である。35語の日源新詞は、全体的には「認知」から「理解」の程度に定着していると思われる。

以下、調査語の定着状況を地域、性別、年齢、学歴、職業との関連で見ると。

#### [地域]

タンジョウ、サイナン、シャンハイの3つの地域の平均定着度はそれぞれ2.28, 2.42, 2.51であり、都市の規模が大きいほど、日源新詞の平均定着度が高くなる傾向がみられる。

3つの地域の定着度を比較するために分散分析を行った。その結果、 $F(2, 402) = 9.605$ ,  $p < .01$ となり、地域の主効果が認められた。HSD法による多重比較の結果、タンジョウの定着度はシャンハイの定着度に対し、有意に低いことが認められた。 $(p < .01)$  また、タンジョウとサイナンを比べると、タンジョウの平均値のほうが低く、有意な傾向が見られた。 $(p < .10)$  シャンハイとサイナンには有意な差は見られなかった。

表10 地域による平均定着度の分散分析の結果

地域	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	151	2.28	0.421	
サイナン	91	2.42	0.456	9.605
シャンハイ	163	2.51	0.488	

$p < .01$

#### [性別]

男性と女性の平均定着度はそれぞれ2.40, 2.39であり、ほぼ同じである。男女の平均定着度を比較するために、t検定を行った。その結果、 $t(403) = -0.204$ ,  $p = 0.838$ であり、有意な差は見られなかった。

表11 性別による平均定着度のt検定の結果

性別	N	平均	標準偏差	t
男性	194	2.40	0.511	
女性	211	2.39	0.419	-0.204

n. s.

#### [年齢]

5つの年齢層の平均定着度は、それぞれ10代 (2.35), 20代 (2.51), 30代 (2.46), 40代 (2.36), 50代及びそれ以上 (2.23) である。この結果を見ると、「10代」を除けば「20代~30代」をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下降する傾向があると言える。

年齢層別の平均定着度を比較するために、分散分析を行った。その結果は $F(4, 399)$



=3.945,  $p < .01$ であり, 年齢の主効果が認められた。HSD 法による多重比較の結果, 「20代」の平均定着度は「50代及びそれ以上」の平均定着度に対し, 有意に高いことが認められた。(  $p < .01$ ) また, 「30代」の平均定着度も「50代及びそれ以上」の平均定着度に対し, 有意に高いことが認められた。(  $p < .05$ )

表12 年齢層による平均定着度の分散分析の結果

年齢層	N	平均値	標準偏差	F
10代	85	2.35	0.346	
20代	86	2.51	0.482	
30代	99	2.46	0.478	3.945
40代	81	2.36	0.456	
50代及びそれ以上	53	2.23	0.533	

$p < .01$

## 〔学歴〕

学歴では, 「中学校及びそれ以下」(2.33)と「高校及び高専」(2.24)は回答者全体の平均定着度(2.40)以下で, 「大学及び短大」(2.46)と「大学院」(2.45)は平均定着度(2.40)以上である。学歴による定着度を比較するために, 分散分析を行った。その結果,  $F(3, 401)=5.006$ ,  $p < .01$ となり, 学歴の主効果が認められた。HSD 法による多重比較の結果, 「大学及び短大」の平均定着度は「高校及び高専」の平均定着度に対し, 有意に高いことが認められた。(  $p < .01$ )

表13 学歴による平均定着度の分散分析の結果

学歴	N	平均値	標準偏差	F
中学校 / それ以下	51	2.33	0.378	
高校 / 高専	82	2.24	0.416	
大学 / 短大	249	2.46	0.474	5.006
大学院	23	2.45	0.572	

$p < .01$

## 〔職業〕

7つの職業の平均定着度はそれぞれ学生(2.37), 公務員(2.36), 会社員(2.48), 教師(2.66), 医療関係者(2.25), メディア関係者(2.61), その他(2.24)であり, 教師の平均定着度が一番高く, メディア関係者がその次である。

職業による平均定着度を比較するために分散分析を行った。等分散性が保証されていないが, 平均値の比較をすると,  $F(6, 393)=5.608$ ,  $p < .01$ であり, 職業の主効果が認められた。HSD 法による多重比較の結果, 「教師」の平均定着度はそれぞれ「学生」( $p < .05$ ), 「公務員」( $p < .05$ ), 「医療関係者」( $p < .01$ ), 「その他」( $p < .01$ )の平均定着度に対し, 有意に高いことが認められた。また, 「メディア関係者」の平均定着度はそれぞれ「医療関係者」( $p < .05$ ), 「その他」( $p < .05$ )の平均定着度に対し, 有意に高いことが認められた。

表14 職業による平均定着度の分散分析の結果

職業	N	平均値	標準偏差	F
学生	97	2.37	0.375	
公務員	79	2.36	0.494	
会社員	58	2.48	0.538	
教師	43	2.66	0.408	5.608
医療関係者	58	2.25	0.434	
メディア関係者	22	2.61	0.412	
その他	43	2.24	0.465	

p &lt; .01

以上で調査語の定着状況がそれぞれの属性との関連をみてきた。5つの属性のうち、地域、年齢、学歴、職業が日源新詞の受容に影響することがわかった。しかし、全体として、どの要因が平均定着度に一番影響が強いのかはわからない。それを確かめるために、平均定着度を従属変数として、SPSSの一般化線形モデルによる回帰分析を行った。表15はその結果である。

地域 (p < .001), 年齢 (p < .05), 学歴 (p < .05) で、それぞれ有意であった。各属性のWaldカイ2乗値を比較してみると、地域 ( $\chi^2=20.653$ , df=1, p<.001) の影響が一番強いことがわかる。性別は有意ではなかったが、職業 (p < .10) には有意傾向が見られた。

表15 各属性が平均定着度に与える効果 (一般化線形モデルによる)

	Wald カイ 2 乗	自由度	有意確率
地域	20.653	1	0.000
性別	0.272	4	0.602
年齢	10.618	3	0.031
学歴	10.286	6	0.016
職業	11.981	1	0.062

## 4.2 語ごとの分析

本節は、調査語ごとの認知率 (聞いたことがある割合)、理解率 (意味が分かる割合)、使用率 (使う割合)、そして平均定着度を算出して各語の定着のようすを確認し、加えて回答者の社会的属性との関連を考察する。

### 4.2.1 調査語の定着のようす

以下の表16と図1は、35の調査語の認知率、理解率、使用率および平均定着度を表す。(表は認知率の降順に並べている。)

表16 調査語の「認知率」「理解率」「使用率」と「平均定着度」

	認知率	理解率	使用率	平均定着度
媒体 (媒体)	97%	92%	54%	3.44
人脉 (人脈)	97%	92%	55%	3.44
人气 (人気)	97%	92%	57%	3.46
萌 (萌え)	97%	91%	55%	3.44
职场 (職場)	97%	90%	52%	3.38
运营 (運営)	97%	89%	47%	3.33
写真 (写真)	96%	89%	47%	3.33
封杀 (封殺)	96%	87%	43%	3.26
料理 (料理)	96%	87%	48%	3.32
达人 (達人)	96%	85%	42%	3.24
王道 (王道)	93%	82%	44%	3.19
完败 (完敗)	93%	80%	44%	3.18
低迷 (低迷)	88%	75%	38%	3.02
量贩店 (量販店)	86%	65%	28%	2.80
单品 (单品)	82%	64%	30%	2.76
年中无休 (年中無休)	76%	59%	24%	2.60
御宅族 (オタク)	69%	46%	17%	2.31
民宿 (民宿)	66%	46%	20%	2.33
绝赞 (絶賛)	63%	40%	12%	2.15
居酒屋 (居酒屋)	62%	41%	14%	2.16
声优 (声優)	54%	36%	14%	2.04
败因 (敗因)	51%	35%	11%	1.97
买春 (買春)	48%	41%	13%	2.13
耽美 (耽美)	48%	28%	10%	1.87
连霸 (連覇)	46%	26%	6%	1.79
舌祸 (舌禍)	38%	22%	4%	1.64
熟年 (熟年)	36%	15%	3%	1.55
中古车 (中古車)	31%	18%	4%	1.52
苦手 (苦手)	31%	11%	2%	1.43
少子化 (少子化)	24%	10%	3%	1.37
定番 (定番)	24%	9%	2%	1.35
中水 (中水)	22%	8%	3%	1.34
乐胜 (楽勝)	22%	6%	2%	1.29
年功序列 (年功序列)	21%	8%	1%	1.29
風呂 (風呂)	17%	5%	1%	1.22
平均	64%	51%	24%	2.40

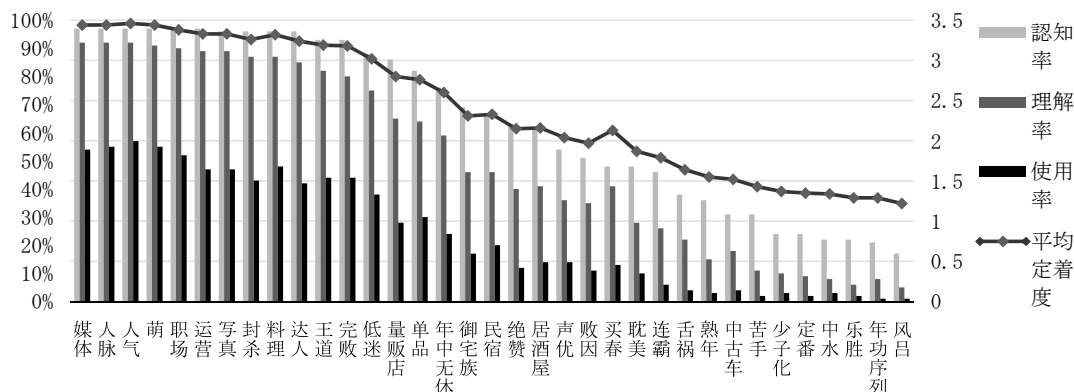


図1 調査語の認知率，理解率，使用率，平均定着度

表16と図1に見られるように，認知率，理解率，使用率が下がるにつれ，平均定着度も下がるという同様の傾向を示している。35語の平均定着度の平均得点は2.40である。それはつまり，全体として調査語の定着は「認知」から「理解」のあいだにあると考えられる。

35語はその平均定着度から以下のように分類できる。

平均定着度が「理解」（3点）から「使用」（4点）の語：

媒体 人脉 人气 萌 职场 运营 写真 封杀 料理 达人 王道 完败  
低迷

平均定着度が「認知」（2点）から「理解」（3点）の語：

量贩店 单品 年中无休 御宅族 民宿 绝赞 居酒屋 声优 买春

平均定着度が「未知」（1点）から「認知」（2点）の語：

买春 耽美 连霸 舌祸 熟年 中古车 苦手 少子化 定番 中水 乐胜 年功序列  
风吕

平均定着値が上位にある語は，“人气”（人气）“人脉”（人脈）“媒体”（媒体）など2000年以前からなじみのある語，または“萌”（萌え）“达人”（達人）などマスコミ等の影響で急速に普及してきた語である。それに対し，下位の語は“风吕”（風呂）“熟年”（熟年）“居酒屋”（居酒屋）など新しい概念や外国の物事を表すもの，または“耽美”（耽美）“声优”（声優）“苦手”（苦手）など一部の社会集団では使われるが，社会全体には普及していないものなどである。

#### 4.2.2 日源新詞の定着度の判定基準とその妥当性

このように，35語をその平均定着度で3つのグループに分けた。以下では，3グループの語がそれぞれどの程度に定着しているかを判断するため，3.1でふれた②の日本語における外来語の定着度調査の判定基準を参照し，平均定着度による外来語の定着の度合いの判定基準を立てる。そして，立てた基準を彭广陆（2013）が述べた中国語における外来語の判定基準と照らし合わせながら，その基準の妥当性について検討する。

まず，平均定着度を定着の度合いを判定する基準として立てる理由を述べる。②の国立国語

研究所の「外来語」言い換え提案では、それぞれの語の「認知率」, 「理解率」, 「使用率」が算出されているが、各語の「理解度」は「理解率」をもとに4段階(25%未満, 25%~50%, 50%~75%, 75%以上)に分けられた。「外来語」委員会(2006)によると、理解率25%未満は最も「分かりにくい外来語」、25%~50%の語は「使用を避ける方が望ましいが、普及定着する可能性もある語」、50%~75%の語は「定着に向かっている語」、75%以上の語は「十分に定着している語」と考えられる。

表16に示すように、35語のうち“媒体”(媒体)“人脉”(人脉)“低迷”(低迷)等理解率が75%以上の語の平均定着度は3.44から3.02の範囲内にある。また、理解率が25%以下の語の平均定着度は1.64から1.22の範囲にある。つまり、平均定着度による分類は国立国語研究所の理解率によるものと概ね一致すると考えられる。また、国立国語研究所の理解率が25%~75%のグループは、本稿では平均定着度が2点から3点のグループに相当する。そうすると、平均定着度が3点から4点の語は「十分に定着している」、平均定着度2点から3点の語は「ある程度理解されていて定着に向かっている」、最後に平均定着度が1点から2点の語は「一過性のもの、もしくは定着可能性不明」と考えることができる。

つぎにこの判定基準の妥当性について考える。2.でふれたように、彭广陆(2013)は中国語における外来語の定着の度合いを判定するには、おおむね2通りの方法があることを指摘している。そのうちのひとつは辞書への収録状況である。特にもっとも権威があると言われる『現代汉语词典』(第七版 中国社会科学院语言研究所词典编辑室2016, 以下『现汉』)は「定着したものしか収録しない方針のようである」(P.17)。以下では、平均定着度で日源新詞の定着の度合いを判定することが妥当であるかどうかを確かめるために、35語の日源新詞の『现汉』における収録状況を確認する。

平均定着度が「理解」(3点)から「使用」(4点)の語:

『现汉』に収録されている語: 媒体 人脉 人气 职场 运营 写真 封杀 料理 达人  
完败 低迷 萌

『现汉』に収録されていない語: 王道

平均定着度が「認知」(2点)から「理解」(3点)の語:

『现汉』に収録されている語: 量贩店 买春 民宿

『现汉』に収録されていない語: 单品 年中无休 御宅族<sup>9</sup> 绝赞 居酒屋 声优

平均定着度が「未知」(1点)から「認知」(2点)の語:

『现汉』に収録されている語: 败因 中水

『现汉』に収録されていない語: 耽美 连霸 舌祸 熟年<sup>10</sup> 中古车 苦手 少子化  
定番 乐胜 年功序列 風呂

9 “御宅族”(オタク)は『现汉』に収録されていないが、“御宅族”の造語要素の“宅”はすでに『现汉』に収録されている。その意味は、「呆在家里不出门(多指沉迷于上网或玩电子游戏等电子室内活动)」「家に閉じこもる(多くの場合はネットやオンラインゲームなどに夢中している)」である。

10 在来語としての“熟年”の意味「丰收的年头(豊作の年)」は『现汉』に収録されているが、日源新詞としての「熟年」の意味「30歳以上の中年及び老年世帯の人」はまだ収録されていない。

“媒体”（媒体）“人气”（人气）など平均定着度が「理解」（3点）から「使用」（4点）の13語のうち12語は『现汉』に収録されているが、平均定着度が「認知」（2点）から「理解」（3点）の語と「未知」（1点）から「認知」（2点）の語は“量贩店”（量販店）“败因”（敗因）など5語しか収録されていない。このことから、『现汉』の収録状況と本稿の実態調査の結果はおおむね一致する傾向にあることがわかる。

平均定着度が「理解」（3点）から「使用」（4点）で『现汉』に収録されていない語は“王道”（王道）である。“王道”（王道）は中国古代から存在する語であり、『现汉』には、在来語としての“王道”の意味「我国古代政治哲学中指君主以仁义治天下的政策」（我が国の古代政治哲学の中に君主が仁政を行うことを指す）が収録されているが、日本から輸入した「王道」の意味「主流， 關鍵， 根本」（主流， 肝心なこと， 根本）はまだ収録されていない。これは以下のような原因が考えられる。“王道”（王道）は平均定着度が高いが、表17に見られるように、回答者の社会的属性によっては定着のようすに大きなばらつきがある。これらは主に10代～20代の学生達を中心に話しことばとして使用されているものである。それにくらべて，“写真”（写真）“料理”（料理）“人脉”（人脈）などの語は回答者の属性による差はそれほど大きくない。つまり，“王道”（王道）はマスコミの影響で急速に認識されるようになったが、まだそれなりの「流行性」が感じられるため、『现汉』は慎重な態度を取っていると考えられる。

平均定着度が「認知」（2点）から「理解」（3点）の語の大多数は、未だ『现汉』には収録

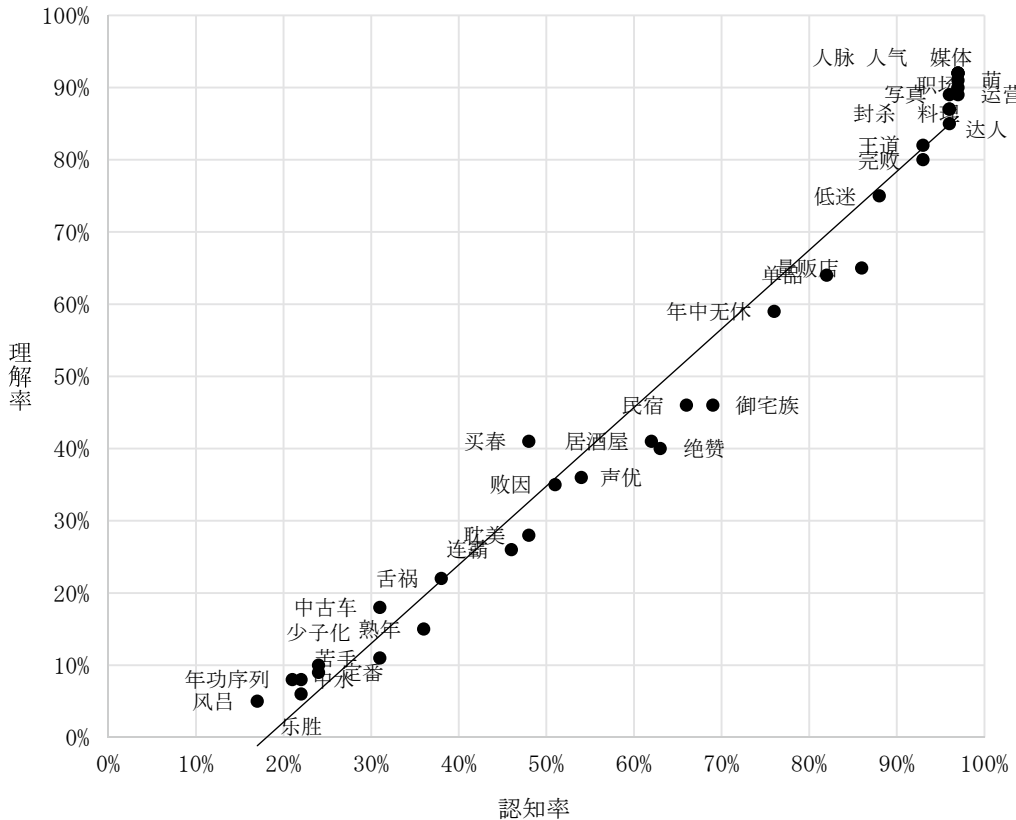


図2 調査語の認知率と理解率

されていない。その理由は、これらの語はある程度理解されていても定着の状況は不安定なためと思われる。図2は、回答者の認知率を横軸、理解率を縦軸にとって、各語を位置づけたものである。平均定着度による3つのグループを比較すると、平均定着度が「2～3」の語は、他のグループより認知率と理解率の差がやや大きくなっている傾向が見られる。これら語の多くは、見聞きすることは多くても、意味が十分理解されていないものと解釈できる。これらの語はマスコミや商業においての使用が多く、調査時点では「流行」性のものであった。そのため、定着に向かっていても十分安定してない状態にあると思われる。

また平均定着度が「未知」(1点)から「認知」(2点)の語は、たとえば“舌禍”(舌禍)のような使用範囲が限られているもの、“中水”(中水)“少子化”(少子化)のような専門性の高いもの、また“年功序列”(年功序列)“風呂”(風呂)のような日本の文化や社会現象に関連するものが多い。これらは中国の日常生活とは関連が弱いいため、十分に広がっていないと考えられる。

#### 4.2.3 調査語の定着の度合いと回答者の社会的属性との関連

35語の調査語の定着の度合いが、回答者の属性と関連するかどうかを確認するためにカイ2乗検定を行った。表17にその結果を示す。有意確率はアスタリスク「\*」とダガー「†」で表し、空白は有意差が見られなかったことを表す。語は平均定着度の降順に並べている。

表17 回答者の属性による平均定着度

	地域	性別	年齢	学歴	職業	平均定着度
人気(人気)	†	*	*		*	3.46
萌(萌え)	*	**	***	*	***	3.44
媒体(媒体)	†	†	†		†	3.44
人脉(人脈)						3.44
職場(職場)		*	†	**	*	3.38
写真(写真)			*		*	3.33
運営(運営)	†			†	†	3.33
料理(料理)	†	*	†		†	3.32
封杀(封殺)			*		*	3.26
达人(達人)		**	***	***	**	3.24
王道(王道)	**		**	**	**	3.19
完败(完敗)	**		*		†	3.18
低迷(低迷)			***	***	***	3.02
量販店(量販店)	**		**	*	***	2.80
单品(单品)	*	*	*	**		2.76
年中无休(年中無休)	***			*	*	2.60
民宿(民宿)	***	*	†			2.33
御宅族(オタク)	***		†		*	2.31
居酒屋(居酒屋)	***		**	**	***	2.16
绝赞(絶賛)			†			2.15

买春（買春）	†	**	***	***	***	2.13
声优（声優）	***	*	***	**	***	2.04
败因（敗因）		**				1.97
耽美（耽美）	***	**	***	***	***	1.87
连霸（連覇）	*		†			1.79
舌祸（舌禍）				*		1.64
熟年（熟年）		*		*		1.55
中古车（中古車）		†	*	†	*	1.52
苦手（苦手）		*	*			1.43
少子化（少子化）		**	**			1.37
定番（定番）	†	*				1.35
中水（中水）		**		**		1.34
乐胜（樂勝）		**			†	1.29
年功序列（年功序列）		*				1.29
風呂（風呂）		†				1.22

(注: \* =  $p < .05$  \*\* =  $p < .01$  \*\*\* =  $p < .001$  † =  $p < .10$ )

全体的には、平均定着度が「理解」（3点）から「使用」（4点）の語は、“萌”（萌え）“王道”（王道）のように属性によりばらつきが大きい（すなわち、統計的有意差が確認された）グループと“料理”（料理）“人脉”（人脈）等のように差があまり見られないグループに分かれている。平均定着度が「認知」（2点）から「理解」（3点）の語は、上に述べたとおり不安定な状態にあり、各属性による差が大きい。とくに“量販店”（量販店）“居酒屋”（居酒屋）“买春”（買春）“声优”（声優）などの語は調査された5つの属性の4つ以上でばらつきが見られた。平均定着度「未知」（1点）から「認知」（2点）の語は、全体的に定着度が低いため、“耽美”（耽美）を除いて、一部の属性でのみ差が見られた。

各語の定着の度合いを具体的に各属性別に見ると、以下のような傾向が見られる。

#### 〔地域〕

地域差は、“声优”（声優）“耽美”（耽美）“萌”（萌え）のようなサブカルチャー関係の語や“量販店”（量販店）“居酒屋”（居酒屋）“民宿”（民宿）のような商売に使われる語で顕著である。また地域による定着度は、例外なく調査都市の中の「小都市」の「タンジョウ」が有意に低くなっている。

#### 〔性別〕

4.1の調査回答者ごとの分析では、その平均定着度に性差は見られなかった。しかしながら、調査語を見ると、その半分以上に性差が見られる。“达人”（達人）“萌”（萌え）のような「流行性」の語や、“单品”（单品）“民宿”（民宿）など商売に類出する語は女性の定着度の方が有意に高いが、“少子化”（少子化）“年功序列”（年功序列）のような専門性の高い語は、男性の方が有意に高かった。



“达人”（達人），“萌”（萌え），“单品”（单品），“民宿”（民宿）などは、男女共に触れる機会のある語かもしれないが、今回の調査結果では女性の定着度の方が有意に高かった。4.2.2でも述べたように、それはおそらく、これらの語がマスコミや商業においての使用が多いこと、また調査時点では「流行」性のものであったことなどから、新しい傾向に関心を持つ人が多い女性のほうが、これらの語をより早く受容したのではないかと考えられる。

#### 〔年齢〕

年齢差は、「10代」を除けば「20代～30代」をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下降する傾向が見られる。例外は“耽美”（耽美）“声优”（声優）“买春”（買春）“少子化”（少子化）などである。“耽美”（耽美）“声优”（声優）のようなサブカルチャー関係の語は「10代」の定着度が有意に高く、“买春”（買春）“少子化”（少子化）等の語については若い世代より「30代以上」の人に理解されていると思われる。

#### 〔学歴〕

「高校及び高専」を境目に、「大学及び短大」と「大学院」のほうが定着度は高い。ただし、“御宅族”（オタク）“耽美”（耽美）“声优”（声優）のようなサブカルチャー関係の語は「中学及びそれ以下」の定着度が一番高い。

#### 〔職業〕

「教師」と「メディア関係者」に高定着度が見られ、「医療関係者」と「その他」は低かった。また“御宅族”（オタク）“耽美”（耽美）“声优”（声優）などのサブカルチャー関係の語は「学生」が一番高い。これは、10代の学生は日本のアニメや漫画などに関心が高いため、サブカルチャー関係の語に馴染みがあると思われる。

## 5. 考察

以上述べたように、35の日源新詞を回答者たちがどのように受容しているかを知るために、日源新詞の定着度をみた。その結果、35語の日源新詞の定着度の平均は2.40であり、「認知」から「理解」の段階にあることがわかった。

また、4.1で見たように、回答者の社会的属性との関連を分析した結果、5つの属性のうち、地域、年齢、学歴、職業が日源新詞の受容に影響していた。地域に関しては、都市の規模が大きいほど、日源新詞の平均定着度が高くなる傾向が見られた。年齢は、「10代」を除き、「20代～30代」をピークに年齢が増すにつれて平均定着度が下がる傾向にあった。学歴については、学歴が上がるにつれ、平均定着度も高くなった。職業に関しては、「教師」、「メディア関係者」の平均定着度が高く、「学生」や「その他」の平均定着度が低い。これらをまとめると、都市が大きくて、若く、学歴が高い人のほうがより日源新詞を受容している。これはある程度予想できる傾向である。

しかし、表15に示すように、この5つの属性のうち、地域の影響が一番強いのは予想外であった。さらに、調査語ごとに回答者の属性との関連を見ると（表17），“萌”（萌え）などの

ようなサブカルチャー関係の語や、“年中无休”（年中無休）“量販店”（量販店）などのような商売に使われる語には地域差が顕著であった。商売に使われる語の受容が大都市で進むのはある程度理解できるが、インターネットが主な流入・定着の経路であり、地域による定着の違いはないと予測していた4つのサブカルチャー関係の語（“萌”＜萌え＞“御宅族”＜オタク＞“耽美”＜耽美＞“声优”＜声優＞）にも地域差が見られた。これらの結果を受け、以下ではなぜ日源新詞の受容に地域差が大きく影響しているのかを考えてみたい。くわえて、年齢層別（10代、20代、30代、40代、50代及びそれ以上）で地域差を見なおし、日源新詞の今後の受容の傾向を予測する。

外来語の受容に地域の影響が大きいのは以下のような原因が考えられる。

- ①地域間の情報格差（外来語に接触する度合いの差）
- ②社会網（social network）の密度の差
- ③学歴の地域間格差

まず①のように、地域間の情報格差が外来語の受容に影響をもたらしていることが考えられる。都市の規模は、どれだけ多様な情報に接することができるかと密接に関わる。現代社会においてその格差は、外来語の広がりにもっとも重要なルートとしてのインターネットの普及率からその一面をとらえることができる。『第39回 中国インターネット発展情報統計』<sup>11</sup>（中国互聯網絡信息中心 CNNIC 2017.1 以下は『情報統計』と略す）によると、「超大都市」シャンハイのインターネットの普及率は74.1%で全国第2位である。それに対して、「大都市」サイナンと「小都市」タンジョウが在る山東省は普及率52.9%で第13位で、全国平均（53.2%）以下の水準にある。『情報統計』の統計は省レベル（日本の県に相当する）までのため、サイナンとタンジョウの個別データは掲載されていないが、「インターネットの普及状況は経済発展のスピードと強い相関関係がある」（互联网发展水平与经济发展速度关联度较高 p.36）ため、山東省の省都であるサイナンのほうがタンジョウよりインターネットの普及率が高いのは予測できる。このインターネット普及率の差が地域間の情報獲得の差（すなわち情報格差）となると言える。

大都市は、インターネットなど各種のメディアが充実しており、さまざまな情報が混在する環境になっている。それに対して、小規模な市町村では、情報伝達システムの発達が十分ではなく、地域の人々が接触する情報は質・量ともに大都市より劣る。日源新詞のような外来語は、各種のメディアを通して取り入れられ、広がっていく。メディア環境の充実度に差があるということは、すなわち外来語に接触する度合いにも差があることになる。たとえば、“单品”（单品）という語を考えてみよう。この語は日本語の意味のままで中国語に取り入れられ、「美容業界やアパレル業界でよく使われるようになっていく」（譙燕等 2011: 171）。大都市においては、コンビニのファッション誌、街中の広告の看板、インターネット、洋服屋の店頭など、

11 『第39回 中国インターネット発展情報統計』（『中国互聯網絡发展状况统计报告』2017.1）は中国互聯網絡信息中心（CNNIC）が発行する中国のインターネットの利用動向に関する調査報告である。1997年より毎年1月と7月の年2回発表されている。

さまざまな場面で“单品”（单品）という語の存在を感じることができる。一方、規模の小さい都市や農村部でも、インターネットやファッション情報誌などによる接触はあると思われるが、そのような情報流入の経路は関心のある人々だけに限られてしまい、大都市のように多数の人々の目に触れる環境は少ない。このような地域間の情報格差により、外来語の受容は影響を受けていると考えられる。

つぎに②のように、社会網（social network）の密度も外来語の受容に影響をもたらしていると考えられる。コーツ（1990）によると、言語社会の構成員は社会網において互いに結ばれているものと見なすことができ、その結ばれ方によって、社会網が相対的に「閉鎖的」であったり、「開放的」であったりする。社会的に移動性が高く、高度に産業の発達した社会に典型的に見られる社会網は、密度が低く、開放的であるが、田舎の村社会や伝統的な労働者階級の社会に典型的に見られる社会網は、密度が高く、閉鎖的である。また、「網目のつまった社会網構造は言語の重要な維持機構として働」く（p.103）。つまり、密度が低く開放的な社会網にくらべ、密度が高く閉鎖的な社会網のほうが、より言語規範を守る傾向にある。外来語は新しく生まれた語として、社会全体に受け入れられ、規範的な使い方になるまで多少時間が必要である。そのため、外来語はまず開放網に属する人々から受容され、徐々に閉鎖網の人たちに広まっていくと推測できる。

今回の調査では、回答者の社会網については調べなかったが、表18に示す3調査地の人口規模および移動人口数<sup>12</sup>のデータから、3都市の社会的な移動性、社会網の密度をある程度推測できる。シャンハイにおける移動人口は総人口数の4割以上を占め、サイナンは1割強である。また、タンジョウのデータは公式ウェブサイトに掲載されていないが、タンジョウが所属している山東省・臨沂市（リング）は市内移動人口数が37万人（2004）であるため、タンジョウの移動人口は他の2都市よりはるかに少ないと推測できる。ということは、シャンハイがもっとも開放的で低密度の社会網、タンジョウがもっとも閉鎖的で高密度の社会網であると考えられ、それが外来語の平均定着度にも影響している可能性があると思われる。

表18 3調査地の総人口数と移動人口数

	総人口数	移動人口数
シャンハイ	2419.70万人（2016）	980.20万人（2016）
サイナン	706.7万人（2014）	85.1万人（2014）
タンジョウ	97.7万人（2015）	-

最後に③学歴の地域間格差についてである。今回の調査では都市間の学歴の等分散性が保たれていなかったため、それも平均定着度の地域差をより顕著にした原因だと考えられる。表19は、学歴で分けた各地域の回答者の数である。全体的には、3都市とも「大学/短大」及び「大学院」の回答者の比率がもっとも多い。一方で、高校以下の回答者（「中学校/それ以下」および「高校/高専」の回答者）比率は各都市でバラバラである。

学歴を職業属性と合わせて見ると、「高校/高専以下」と回答した者たちは、現役の中学生・

<sup>12</sup> 人口移動とは、人口がある地域から他の地域へ移動すること（日本国語大辞典 第二版 小学館 2003）。ここでの移動人口は本籍地が現住所と違う人のことをいう。総人口数は移動人口数を含む数である。

高校生グループと最終学歴が中学校・高校までの社会人グループの2つに分けることができる。表20に示すように、現役中高生の調査語の平均定着度は2.35、社会人は1.98で、現役中高生のほうが日源新詞の受容は進んでいる。このような状況を見ると、これらの2グループは同じ学歴レベルでも別の集団とみなすべきだと考えられる。4.1で述べたように、大卒以上の回答者は外来語をよく受容しているが、現役中高生たちは大学に進学し、大卒以上の平均定着度を維持するまたはそれを上げると考えられる。

高校/高専以下の社会人の回答者数は、それぞれタンジョウ27人、サイナン9人、シャンハイ13人であり、「小都市」であるタンジョウの方が低学歴の回答者の割合が多い(16.6%)。

表19 地域と学歴のクロス表

		中学校/それ以下	高校/高専	大学/短大	大学院	合計
タンジョウ	N	4	53	101	5	163
	%	2.5%	32.5%	62.0%	3.1%	100.0%
サイナン	N	8	16	58	9	91
	%	8.8%	17.6%	63.7%	9.9%	100.0%
シャンハイ	N	39	13	90	9	151
	%	25.8%	8.6%	59.6%	6.0%	100.0%
合計	N	51	82	249	23	405
	%	12.6%	20.2%	61.5%	5.7%	100.0%

表20 現役の中学生・高校生と最終学歴が中学校・高校までの社会人の数

		学生	社会人
タンジョウ	N	30	27
サイナン	N	15	9
シャンハイ	N	38	13
合計	N	83	49
	平均定着度	2.35	1.98

(職業に関しては欠損値が1つあった)

真田(2012)は、「文化的上位にある言語や方言からの借用語が、顕在的威信を持つものとして、社会的上層部から浸透していくということが起きる」(p.149)という。したがって、社会の上層部に位置する高学歴の人々は、外来語としての日源新詞を先に受容する可能性が高いと考えることができる。サイナンとシャンハイは、高学歴の回答者が多いために日源新詞の受容が進むが、タンジョウは低学歴者の割合が多かったことが、平均定着度に地域差が見られた原因のひとつのだと思われる。

以上で述べてきたとおり、日源新詞の受容に地域が一番影響するのは、地域間の情報格差、社会網の密度の差、そして学歴の地域間格差などが原因と考えられる。しかしながら、この傾向は今後も変わらないものではない。将来交通通信手段の発達や社会の情報化がさらに発展すれば、地域間の情報格差や社会網の密度の差の縮小、教育の普及による地域間の学歴格差の縮

小などが生じ、地域の影響が弱まる可能性は十分に考えられる。実際に年齢層別（10代、20代、30代、40代、50代及びそれ以上）で地域差を見なおした結果、10代の回答者は日源新詞の受容に地域差は見られなかった（表21）。このことは、地域の影響が徐々に弱くなっていく兆しと言えるかもしれない。

以上をまとめると、現段階では、日源新詞はまず大都市の高学歴の若年層によって受容され、他の世代や地域に広まっていく傾向にあると言える。しかしながら、これからは通信手段や社会の情報化にともなって、地域の影響の弱化が見込まれる。

表21 地域による平均定着度の分散分析の結果（年齢層別）

地域 (10代)	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	29	2.32	0.360	0.200
サイナン	17	2.36	0.343	
シャンハイ	39	2.38	0.344	
地域 (20代)	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	43	2.39	0.498	4.236*
サイナン	21	2.52	0.432	
シャンハイ	22	2.75	0.425	
地域 (30代)	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	42	2.27	0.318	6.921**
サイナン	21	2.51	0.425	
シャンハイ	36	2.64	0.582	
地域 (40代)	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	37	2.19	0.394	6.184**
サイナン	19	2.43	0.516	
シャンハイ	25	2.57	0.407	
地域 (50代/それ以上)	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	12	2.14	0.593	0.425
サイナン	13	2.17	0.540	
シャンハイ	28	2.29	0.515	
地域	N	平均値	標準偏差	F
タンジョウ	151	2.28	0.421	9.605**
サイナン	91	2.42	0.456	
シャンハイ	163	2.51	0.488	

また、調査語ごとに回答者の属性との関連を見ると、主にインターネット経由で広まるサブカルチャー関係の語に地域差が見られたのは予想外の結果であった。地域差が出た4つのサブカルチャー関係の語（“萌” < 萌え > “御宅族” < オタク > “声优” < 声優 > “耽美” < 耽美 >）を年齢層別（10代、20代、30代、40代、50代及びそれ以上）で見なおした結果が表22である。

表22 4つの語の平均定着値（年齢層別）

	10代	20代	30代	40代	50代/それ以上
萌（萌え）	3.73	3.58	3.43	3.33	2.90
御宅族（オタク）	2.56	2.51	2.27	2.16	1.88
声优（耽美）	2.46	2.28	2.03	2.08	1.63
耽美（声優）	2.32	1.98	1.84	1.49	1.60

4つの語はともに10代の回答者の平均定着度が一番高く、年齢が上がるにつれ、平均定着度は下がる傾向にある。これは年齢差の全体的な傾向とは異なる。調査語全体では、10代を除き、「20代～30代」をピークに年齢が上がるにつれて平均定着度が下がる傾向にある。つまり、ほかの日源新詞にくらべると、サブカルチャー関係の語は10代の回答者に集中的に使用されていると考えられる。

また、年齢層別に4つの語の地域差を見ると、表21で示した結果と同じく、10代の回答者の語の受容には地域差が見られなかった。つまり、サブカルチャー関係の語彙の主な使用者には地域差がないと言える。その一方で、「20代～40代」の回答者では4つの語の受容に地域差が見られた。4.2で述べたように、10代の若者は日本のサブカルチャーに関心が高く、主にインターネット経由で日本のアニメや漫画などに触れるため、居住地域に関係なくサブカルチャー関係の語を受容している。20代～40代の回答者は、若い世代ほど受容が進んでいるが、受容の地域差はそれらの世代に集中して見られる。つまり、20代～40代の回答者は、サブカルチャー関係の語をほかの日源新詞と同様のプロセスで受容するため、地域差が生じるものと考えられる。サブカルチャー関係の語のように、特定の集団において集中的に受容されるものは、他の日源新詞と異なる受容のプロセスで社会の中に定着していくと予想することができる。

## 6. おわりに

定着度調査は外来語の使用状況を把握するためには非常に重要である。外来語の定着の度合いを確認できるだけでなく、性差や年齢差などの要因との関わりも見ることができ、外来語が社会の中でどのように受容されているのかを確認することができるからである。

本稿は日源新詞の定着度の確認を試行するものである。中国の三都市においてアンケート調査を行い、統計的手法で分析し、調査項目の日源新詞は社会的に普及しているのか、地域、性別、年齢、学歴、職業などの回答者の社会的属性との関わりはどうかなどを追求した。

分析の結果、調査した35語の日源新詞は、全体的にある程度まで理解されており、定着に向かっていく段階であることがわかった。またその受容は回答者の社会的属性によりばらつきが見られたが、それは教育や情報環境などの変化による結果だと考えられる。

本稿は、日源新詞を社会言語学的観点から分析する試みではあるが、都市により回答者の社会的属性に偏りがあること、調査項目数が35と多くはないことなど、不十分な点もいくつかある。しかしながら、先行研究では十分検討されてこなかった話者や社会という観点から日源新詞を捉えた試みである点は有意義なものと考えている。

今後の課題としては、言語外的要因（中国語母語話者の社会的属性）が「日源新詞」の受容

に与える影響をさらに詳しく分析すること、「日源新詞」を中国語に同義語がある場合とない場合など、さらに細かく分類して分析することなどが必要と考えている。そして、定着度調査だけではなく、中国語話者が日源新詞に対して持つ意識やイメージ、そして日源新詞の導入により生じた意味用法のゆれなども分析に含めながら、日源新詞の受容の全体像を明らかにしたいと考えている。

## 参考文献

文献：

- 高名凱，刘正琰（1958）『現代汉语外来词研究』文字改革出版社
- 顾江萍（2007）「汉语中日语借词研究」厦门大学博士论文 [D]
- 洪洁（2011）「浅谈汉语中的日源新词－以“媒体”为例」『日源新詞研究』2011学苑出版社
- ジェニファー・コーツ（著）吉田正治（翻訳）（1990）『女と男と言葉－女性語の社会言語学的研究法』研究出版社
- 譙燕，徐一平，施建军編（2011）『日源新詞研究』学苑出版社
- 国立国語研究所（2004）『外来語に関する意識調査』国立国語研究所
- 国立国語研究所（2005）『外来語に関する意識調査Ⅱ』国立国語研究所
- 国立国語研究所（2006）『新「ことば」シリーズ19外来語と現代社会』国立印刷局
- 芦茜（2011）「日源新詞“封杀”的考察」『日源新詞研究』2011学苑出版社
- 彭广陆（2000）「从汉语的新词语看日语的影响之一－说“～族”」『汉日语言研究文集』第三辑 北京出版社
- 彭广陆（2002）「从汉语的新词语看日语的影响之二－说“写真”」『日本语言文化论集』第三辑 北京出版社 文津出版社
- 彭广陆（2003）「从汉语的新词语看日语的影响之三－说“蒸发”」『日本学研究』第十二期 世界知识出版社
- 彭広陸（2013）「中国語の新語に見られる日本語からの借用語」『日本語学』第32巻第13号11月号 pp. 14-25明治書院
- 秦晓晖（2015）「对20世纪80年代以后进入中国的新日源外来词的考察－以大学生的接纳情况为中心」南京财经大学硕士论文 [M]
- 真田信治（編）（2012）『社会言語学の展望』くろしお出版 p.149
- 梁敏鎬（2007）「日本語と韓国語の外来語の受容意識－イメージ調査の分析」陣内正敬，田中牧郎，相澤正夫編（2012）『外来語研究の新展開』，pp.148-167，おうふう
- 中国国家国务院（2014）『国务院关于调整城市规模划分标准的通知』国発〔2014〕51号
- 中国互联网络信息中心 CNNIC（2017.1）『第39回 中国インターネット発展情報統計』

辞書：

- 『日本国語大辞典』（第二版）小学館 2003
- 『現代汉语词典』（第七版）商务印书馆 2016

サイト：

国立国語研究所

<http://www.ninjal.ac.jp>

文化庁ホームページ

<http://www.bunka.go.jp>

中国上海市役所公式サイト（シャンハイ）

<http://www.shanghai.gov.cn/nw2/nw2314/nw24651/nw33466/index.html>（2016-01-18）

中国国家统计局

<http://data.stats.gov.cn/search.htm?s=2015%20上海%20gdp>（2016-01-18）

中国済南市役所公式サイト（サイナン）

<http://lib.sdsqw.cn/bin/mse.exe?seachword=&K=d1&A=26&run=12>（2016-01-18）

中国鄒城県役所公式サイト（タンジョウ）

<http://tancheng.gov.cn/index.php?r=tcgk/1/15759>（2016-01-18）

中华人民共和国中央人民政府公式サイト

[http://www.gov.cn/zhengce/content/2014-11/20/content\\_9225.htm](http://www.gov.cn/zhengce/content/2014-11/20/content_9225.htm)（2016-01-18）

原稿受領日：平成29年8月31日；Received 31 August 2017

掲載受理日：平成29年12月7日；Accepted 7 December 2017